

令和6年度 第2回大井町いじめ防止対策調査会 会議録

日 時	令和7年2月10日（月）	14時00分～15時50分
場 所	大井町役場3階301会議室	
出席委員	学識経験者	笠原 陽子（委員長）
	学識経験者	杉崎 雅子（副委員長）
	医師	伊藤 淳
	弁護士	古谷 泰宏
	社会福祉士	重本 晴賀
出席職員	教育長	夏苅 一壽
	教育総務課長	矢吹 高広
	指導主事	山本 順一
	教育指導員	植松さとみ
欠席委員	なし	
欠席職員	なし	
傍 聴 人	なし	

会議内容

1 開 会

○矢吹教育総務課長から開会の宣言をする。

2 教育長あいさつ（要旨）

はじめに、本日の調査会への出席に対してお礼を述べる。

本町の小・中学校においては、いじめ問題を含めて大きな問題もなく、順調に教育活動が行われている。昨年の8月に「いじめの重大事態の調査に関するガイドライン」が改訂される中で、学校運営を行わなければならないと考えている。委員の皆様の視点からご示唆をいただければありがたい。

今回は学校を会場にして開催することを考えていたが、前回の調査会を受け、教育委員会として確認することがあり、皆様からご指導を賜りたく、前回と同様に開催させていただくこととした。

3 委員長あいさつ

年2回の会議であり、皆様から多くの意見等をいただければありがたいです。教育長のあいさつにもありましたが、大きな問題もなく教育活動が行われていることは、たいへん良いことだと思います。毎日の小さな取組みが最終的には子どもたちをしっかりと見る目につながっていくと思いますので、本日もよろしくお願いします。

4 議 題

(1) 情報提供

- ① 幼児児童生徒指導担当者会議で共通理解を図ったこと
- ② 令和6年度全国学力・学習状況調査の結果
- ③ いじめ防止に向けた各小中学校の取組み

【笠原委員長】

ただいまの説明に関して、質問・意見がありますか。

【杉崎委員】

教職員向けスクリーニングシートの実施時期や頻度を教えてください。

【山本指導主事】

学校によって違いがありますが、今まで実施していた学校生活アンケートにプラスして実施しています。例として掲載した学校は月1回実施し、各ブロックの会議で話題にしています。また、今年度から始めた学校や校内の担当者会議でピックアップしている学校もあります。

【古谷委員】

学校と各関係機関とのつながりを示した図は、現在考えられるものをまとめているのですか。

【山本指導主事】

そのとおりです。

【古谷委員】

今後、補足したり重点的にすべき分野を検討したりしていくということですか。

【山本指導主事】

そのとおりです。私がこの1年間で見えてきた関係機関をピックアップしてみました。

【伊藤委員】

全国学力・学習状況調査の各教科の数値を示したことは、この会議で検討することとどのように関わってきますか。

【山本指導主事】

質問調査以外の内容も情報として把握していただきたいということで提示しました。

【伊藤委員】

基礎資料的な意味合いですか。

【笠原委員長】

数値だけでなく、無解答率に注目すべきであると考えます。わからないから解答しないのか、答えようとする意欲がないのかということが見えてきます。学校の中では、自分自身の考えや交友関係を築くのが授業の場であると捉えているので、授業がどのように進んでいるのか、学習内容を理解できているのか、授業に参加しようとしているのかという一端を見る上でも数値を参考にしています。授業がわかるということが、基本的には子どもたちの精神的な安定や意欲に結び付くだろうと整理させていただいています。

【笠原委員長】

幼稚園、小・中学校の担当者もこのように理解されているのですね。

【山本指導主事】

この調査結果を知らせる担当者会は別に設け、そこで知らせています。先日の幼児児童生

徒指導担当者会議では、この資料は提示していません。

【伊藤委員】

ありがとうございました。自己肯定感に関する「自分には、よいところがあると思いますか」という質問で、「当てはまる」と回答した中学生の割合が全国・県の半分くらいであることは課題だと思います。

【重本委員】

スクールソーシャルワーカーと担任との共有の方法、課題などがありますか。

【山本指導主事】

本来ならば学校がスクールソーシャルワーカーに依頼してケース会議などに参加していただくのがベストですが、スクールソーシャルワーカーの勤務日数が少ないため、私がつながっている状況です。学校もどのように活用してよいかわからないのが課題です。中学校の生徒指導部会や町の要保護児童対策協議会にも参加していますが、上手につなげることができていないようです。勤務日数が少ないので、スピード感があまりないように思います。

【重本委員】

温度差がありそうですね。

【笠原委員長】

今の重本委員の質問は、本日の協議会の初動体制につながってくると思います。スクールソーシャルワーカーの活用の仕方がわからないという現場の先生の声は気になる所です。後ほど、皆様に意見を伺いたいと思います。

(2) 本町が取り組むべきいじめ防止に向けた取組み

【笠原委員長】

協議の柱が「学校の相談体制の見直し」「いじめの未然防止につながる取組み」の2つありますが、相互に関連のあるものですので一括して扱いますが、発言する際に柱の視点がわかるようにしていただければありがたいと思います。

【古谷委員】

「いじめの重大事態の調査に関するガイドライン」は内容的にも充実したものになりました。重大事態に至らない場合であっても、体制づくりなど細かい記載がされており、ある程度の権威ある指針だと思います。各教職員がガイドラインを読むことが理想ですが、日々の教育活動に追われて時間がないと思います。そのため、ハブになる人には研修を充実させ、関係会議などでその内容を周知させていくことで、ガイドラインに適応したものにしていく必要があると思います。

【笠原委員長】

幼児児童生徒指導担当者会議で各校の担当者には説明しているということですが、どのようにして一人ひとりに浸透させていくか、その一方で、働き方改革との兼ね合いもあると思います。好事例や工夫できる点などがありましたらお願いします。

【杉崎委員】

いじめを察知し、どのような対応をするか共有することがスタートになると思います。それができれば、組織としての今後の動きを都度、ガイドラインで確認すればよいと思います。

【笠原委員長】

日常生活の中で教職員が子どもの様子を丁寧に見て、いじめが起こらないようにする未然

防止についてはいかがですか。各校では、いじめの未然防止に向けて、基本方針などが十分に認識されていますか。

【山本指導主事】

年度初めの会議で、いじめ防止に関する基本方針が提示されて共通理解が図られますが、そこで閉じられているように思います。児童生徒の情報交換は日常的に行っていますが、基本方針の理解などは十分に浸透していないと思います。

【伊藤委員】

重大事態の定義では、疑いがあった段階で対策を始めるということですが、「疑うきっかけはどこにあるのか」ということだと思います。できることとしては、スクリーニングシートの活用があると思います。1学期と2学期で回答状況に違いが見られれば、疑うきっかけになると思います。

【重本委員】

一人では一方的な視点になってしまいますが、多くの人が付けることで多角的に見ることができるという良さがあると思います。判断基準も個人差があるので、お互いに照らし合わせることで様々な気づきが出て、アンテナに掛かるのではないのでしょうか。先生がスクリーニングシートを一人ひとり付けていくことは時間的に可能ですか。

【山本指導主事】

児童生徒数が多い学校では、ある程度時間のとれる夏休みの研修で実施していますが、日常的に実施することは難しいと思います。児童生徒数が少ない学校では可能だと思います。夏の研修も今までは実施していなかったもので、第一歩としては良かったと思います。

【重本委員】

早期発見という意味では、日常的に実施していないと意味がないように感じますが、一歩進んだことは良いのではないかと思います。ただ、今後、日常的な業務として実施していくのであれば、負担が少ない方法で活用できると良いと思います。

【笠原委員長】

いじめは未然防止・早期発見が一番基本になりますが、重大事態の対応という話になると、学校の認識が若干気になります。いじめ防止基本方針は誰が作成していますか。

【夏莉教育長】

最初の平成26年は全体で作成しましたが、部分的な改訂の際は担当で行い、全体で共通理解を図りました。組織で動いているので、担当者や管理職が中心となっていますが、それが一人ひとりにどれだけ浸透しているかは課題として捉えています。また、年3回いじめに関するアンケート調査を実施し、気になる児童生徒は担任などが対応しています。

【笠原委員長】

4月の職員会議では、どのように共有しているのですか。各校で定めている基本方針を一つずつ確認しているかということです。学校によって違いがあるので、異動してきた職員もきちんと方針を理解する必要があります。子どもたちを注意して見ていく視点や具体的にすべきことなどが共有されているかということです。

いじめ防止指導の年間計画が作成されている学校がありました。教師が各月にすべきことを共通理解し、実行に移すことが明確になっていることが良いと感じました。学校では担任に任されることになってしまうので、年間を通して全職員が同じ歩調で取り組むことが重要だと思います。それが、いじめ防止に対する学校の行動指針になり、日常生活に落とし込む

ことができる実効性のあるものだと思います。

【古谷委員】

私が担当した事例ですが、ある学校ではベテランの先生がいじめを抑えたり、全体を調整したりしていました。しかし、その先生が異動となり、どうしたらよいかということになりました。また、指導力があまりない先生の学級が荒れだして、いじめが発生したことがありました。先生の資質も問題ですが、生徒への対応の仕方が教育の核になると思います。先生の個性や能力にすべて頼ることは危険性があるかと思います。それを防ぐために、チェックリストやスクリーニングシートを活用したり、年間計画を立てたりすることが校内の体制づくりになり、外部の協力を得ることにもつながると考えます。一人の能力にすべてを頼らないことが働き方改革にもつながり、教師として何をすべきか明確にすることが大切であると思います。

【笠原委員長】

児童生徒の自己肯定感の低さに対しては、一人の先生に頼るのではなく、どの先生にも頼れる、全員で子どもたちを見るという学校の体制づくりが大切になると思います。自分に視線を注がれている、自分を気にしてくれているだけで、子どもたちは違ってくるのではないのでしょうか。

【伊藤委員】

「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」という質問に対して、特に中学生は肯定的な回答の割合が全国・県と比較して低くなっています。いつも大人に守られていると感じる生徒が少ないと言えると思うし、自己肯定感を高く持たないから他人に対しても優しく接することができないという背景があるのではないかと思います。以前から同じような結果が続いているのであれば、そこには取り組むべき課題があるのではないかと考えます。また、過去と比べて今年度だけ特に低くなっているのであれば、その原因を調査する必要があると考えます。その意味でも、課題解決の糸口になる資料だと思います。

【笠原委員長】

事務局では経年変化がわかりますか。

【山本指導主事】

全国学力・学習状況調査については対象児童生徒が違うので、経年変化は追っていません。

【伊藤委員】

全体の中で、極端に低い年があれば振り返ることができると思います。

【夏莉教育長】

これまでも自己肯定感が低い状態は続いています。その対応策として、道徳教育の推進、教科指導の充実などに取り組んでいます。

【伊藤委員】

小学校の段階では、全国・県と比較してそれほど差がないのですが、中学校では明らかに差が出ています。大井町特有の課題があるのではないかと思います。毎年検討してその原因が見つからないという難しさを感じます。

【笠原委員長】

3つの小学校から1つの中学校に進むということは、何か影響がありますか。小学校での

取組み方に違いはありませんか。小学校と中学校が連携していじめの問題にどのように捉えるかという視点が不可欠であることを示唆していると思います。その意味でも、小学校と中学校だけの状況を見るのではなく、地域の特色や3小学校の取組みを踏まえていくことが重要な視点であると思います。

【伊藤委員】

スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの人数が少ないので十分な対応ができないこともあります。小学校の時に課題がある児童に対して中学校で継続して支援できる仕組みづくりがあると良いかもしれません。

【山本指導主事】

今年度から、中学校に配置されているスクールカウンセラーが小学校へ月に1回巡回訪問をしています。スクールカウンセラーに対応していただき、中学校に進学しても引き続き見ていただく取組みを始めました。

【夏苅教育長】

実は、この取組みは以前からも行っていました。個別に対応していたので、はっきりとわかっていなかったのだと思います。

【笠原委員長】

小・中学校をつないだ教育相談体制の構築の他、何か取組みがありますか。

【山本指導主事】

授業の作り方、児童生徒に関する情報交換などの場があります。

【伊藤委員】

スクールソーシャルワーカーの活用の仕方がよくわからないという話がありました。経済的に困窮している家庭、ひとり親家庭などの情報が中学校に伝わると思うので、その情報に基づいてスクールソーシャルワーカーに入っていただくこともできると思います。小学校の段階から入っていただければ、中学校でも継続して対応していただければと思います。学校と家庭とスクールソーシャルワーカーとで支援策を検討していただければ、何をすればよいかわからないということはないと思います。まだお互いの連携が不足しているように感じました。

【重本委員】

コミュニティと学校のソーシャルワーカーの連携、子どもの居場所づくりに取り組む人との連携なども考えていくと良いかと感じました。今ある社会資源の中で賄えない部分も出てくるので、学校だけに頼るのではなく、地域や自治体でできることを検討しても良いと思います。

【笠原委員長】

幼稚園、小・中学校と関係機関とのつながりを示した図がさらに具体的なものになるわけですね。

【重本委員】

とてもわかりやすく、整理されている図だと思います。公的なものだけでなく、インフォーマルな社会資源が隠れていたり、公的な部分でも何かできることがあったりするかもしれないので、その部分が増えてくると未然防止にもつながると思います。

【笠原委員長】

地域学校協働活動推進員の持っている情報はフォーマルだけでなく、それ以外のものをど

のようにして取り込んでいくか必要になりますね。

【杉崎委員】

学級担任の先生は、担任している子どもに関することで連携して初めて、このようなケースでお願いできるということがわかるのではないかと思います。このような場合にこの機関と連携できるというような具体的なリソースマップがあると良いかもしれません。

【山本指導主事】

先ほどの図に矢印を示しながら事例を紹介したいという構想はあります。

【笠原委員長】

地域の事例を取り扱うと限定されてしまいます。子ども教育支援課ホームページのスクールソーシャルワーカーの画面に、過去のケース会議の検討事例があります。基本的なケース会議の持ち方や情報の共有の仕方などの流れが整理されているので、まだ十分活用できると思います。総合教育センターにある事例集など、外部の資料を参考にしても良いかもしれません。

【笠原委員長】

校内の相談体制づくり、町としての基本的な考え方、子どもの見取り方など、いじめの未然防止に関する意見がだいぶ出されましたが、他に気になることはありますか。

【杉崎委員】

自己肯定感を高めることは全国的な課題であると思いますが、いじめのことに限定すると、国立教育政策研究所の調査では小学校段階での自己有用感の育成がいじめ防止に効果的ということです。小学校の段階で人の役に立つ体験、ボランティア活動、異年齢活動で助けられたことなどのフィードバックにより、自己有用感を意識させることが大切であると思います。

もう1点は、授業改善に取り組む中で、子どもの自己肯定感を高めていただけたらと思います。「主体的・対話的で深い学び」の授業展開は、どの程度浸透していますか。

【山本指導主事】

その視点で授業改善を行うことは、これまでも言われ続けています。本町では、主体的な部分で子どもが問いをもって学習に取り組むことを各校で大切にしています。道徳においては、友だちと話したい、友だちに聞いてみたいと思えるような学習課題をつくることがテーマになっています。算数でも、解決したい、はっきりさせたいという思いを大切に研究に取り組んでいます。

【杉崎委員】

主体的な取り組みを行うことは、心理面にも効果があると思います。学力面にも効果が表れてくると良いかと思います。

【笠原委員長】

授業の中で子どもの居場所をどのように作るか、それは自己有用感、自己肯定感をどれだけ丁寧に見取ることができるかだと思います。見取る力は授業をするだけでは身に付かないのですが、そのための研修を町では取り入れていますか。「主体的・対話的で深い学び」をするベースになるものは、それを見取る力です。それがないと言葉で流れてしまうので、4人のアドバイザーから指導助言をいただいているとのことですが、もう少し説明がありますか。

【山本指導主事】

4人のアドバイザーが各校に年間3回程度来ていただき、授業参観後の協議をとおして指導助言をいただく形式をとっています。専門的な知見から見取りの部分、授業づくりの視点

など助言をいただいています。町の学びづくり研究会で、子どもの姿をきちんと捉えてくださいと教育委員会から伝えています。

【笠原委員長】

見取ったことを共有していますか。先生たちが具体的に「子どもの学びは～だった」など言語化して共有する場はありますか。

【山本指導主事】

小学校の研究協議の中では、子どもの姿で語るようにしています。また、中学校では生徒が協議会に参加して、生徒自身が今日の学びについて先生方に伝えています。

【笠原委員長】

子どもたちが自分の学びを振り返ったり、先生が自分たちの取組みを言語化して話し合ったりすることが自己有用感につながることにについてどのようにお考えですか。

【伊藤委員】

言語化しないと、振り返った時に気づかないことがあるので大事なことだと思います。これは日々トレーニングをしておかなければできないように思います。時間をかけていく必要があるのではないのでしょうか。

【笠原委員長】

経験年数に関係なく、常にブラッシュアップすることが子どもたちの変容につながっていくことになりますね。

【古谷委員】

情報モラルに関する動画はさらに活用できると良いかと思います。対象は保護者ですか。

【山本指導主事】

小・中学校の保護者向けに配信しています。

【古谷委員】

子ども向けの動画を作成して学校で流すことも、いじめに関する学びの機会になると思います。予算的な問題もあるので、どの程度まで取り組むべきか、効果はどうか、いくつか課題はあると思いますが、様々な方法で取り組むことも未然防止につながる手段であると思います。

【笠原委員長】

重大事態が発生した時の対応も大事ですが、いじめの未然防止に向けて学校がどのように取り組むかということがそれ以上に大切なことだと思います。平穩に毎日が過ぎている状況の中で、丁寧に未然防止に努めていただくことが町に求められることであり、町としての課題性からどのような視点で取り組むかを明確にして、それを学校と共有しながら専門的な立場の人に加わっていただくこと、また、具体的な好事例を使いながら先生方の技術を高めたり理解を図ったりしていくことが必要になると思います。自己肯定感や自己有用感についてはこれまでずっと言われ続けていることですが、なかなか改善されないのはなぜでしょうか。

【伊藤委員】

自己肯定感を育むスタートラインは家庭であるし、親子関係、愛着関係、母子関係の形成時から自己肯定感を育むことが始まっています。小・中学校の先生が対応を変えても中学生の自己肯定感が急に高くなることはないし、課題は相当根深いと思います。なぜこの問題が解決しないかという、一つには家庭の力が低下していることがあげられると思います。社会的な状況が変わり、安定した家族の姿が失われてきているからかもしれません。だからし

かたないということではなく、日々の生活の中で子どもたちの自己肯定感が少しでも高くなるような取組みを考える必要があると思います。学校生活をイメージすると、子どもたちは給食の準備、清掃など様々なボランティア活動をしています。「教室をきれいにしてくれてありがとう」などの優しい声掛けが溢れれば、子どもたちの自己肯定感が多少は高くなるのではないのでしょうか。優しい声掛けをするためには、先生方の心が落ち着いていなければならないので、教職員の労働環境を良くすることも大切だと思っています。

【重本委員】

給食当番の日替わり仕事分担、保健室へ一緒に行ってもらった時の「ありがとう」という声掛けなど、些細なことで子どもたちの自己肯定感を高められると思いました。

【杉崎委員】

大井小学校のステップルームの支援員が足りないようですが、人がいないのですか、予算が足りないのですか。

【夏苺教育長】

予算上の問題と捉えてください。中学校にもステップルームがあり、町費職員で対応していますが、今回、県の配慮で全中学校区に配置されることになりました。県の提示した時間数では足りないので、町で時間数をプラスして1日6時間で対応することにしました。開設時刻よりも子どもが早く登校すると担当職員が不在であり、学校の教職員が対応している状況です。また、通室する子どもの数が増え、対応を検討しているところです。

【杉崎委員】

人数を増やす方向にありますか。

【夏苺教育長】

勤務時間の増加を検討しています。

【古谷委員】

日本の子どもたちの自己肯定感が低いのは、尺度が一元的だからだと思います。小学校では運動ができる子は人気がありますが、中学校では学力的な尺度が大きな割合を占めると思うので、学力的に振るわない子は自己肯定感が高くないのかもしれませんが。そのためには小学校段階から多様な活動を支援する必要があると思います。多様性のある価値観を成就させて、得意な分野を中心に自己肯定感を高めさせていくとよいのではないのでしょうか。

【笠原委員長】

様々な取組みがなされている中でも、先生の心の安定と子どもたちの心の安定は向き合っているものであると考え、一つのことを解決すれば良いというわけではないと思います。本日の委員から出された意見を事務局の方で整理していただければと思います。

これで議題を終了させていただきます。

(3) その他

○質疑・意見等なし

5 閉 会

○矢吹教育総務課長から閉会の宣言をする。 (次回は6月下旬に開催予定)